

2020
秀作

第18回「金融と経済を考える」高校生小論文コンクール

みんなで豊かになるために

大分県・大分東明高等学校 2年 宮川 桜

6月に入った頃、家庭科の先生がこんなことを聞いてきた。

「みんな10万円をどう使う？」

2020年5月頃、新型コロナウイルス対策の一環である家計への支援として、国民へ一律に10万円の特別給付金が支給されることが発表された。

その給付金を私たちが使うとしたらどう使うだろうか。高校生の使い道といえば、ある程度限られてくる。娯楽費、学用品代、お菓子代、いまはコロナが蔓延まんえんしているから外食は考えにくい。

なんとなく想像はしていたことだが、クラスは大体二つのパターンに分かれた。「貯金する人」と「申請しない人」。かくいう私も後者に手を挙げた。お金が足りないと問題になっているのに、給付金が無くても困窮するわけではない私のような人が自分のために使うのはおかしいと思ったからだ。そうでなければ、「将来を考えて。」という理由で前者に手を挙げるつもりだった。

私がなんとなく予想したクラスのお金の使い道ランキングは、ほとんど正しかった。しかし、先生の反応だけが、私の予想と真逆だった。マスク越しだったが、先生が私たちの答えに対して明らかに苦笑いをしたのがわかった。

私は少しばかり困惑したが、先生が言った次の言葉で、おぼろげではあるが、先生の反応のわけがわかったような気がした。

「使えるときには使いなさい。お金は『天下のまわりもの』よ。」

「お金は経済の血液」という例えがあるように、お金は銀行・企業・家庭などの間でぐるぐると回り、うまく循環していれば、どこにでもお金が供給され、みんなが発展していけるシステムになっている。

この、中学校で習った内容を思い出して、私はふと疑問を抱いた。お金が本来循環するものなら、お金が足りなくなることで自分もおかしいのではないか。お金が足りなくなるということは、どこかでお金がストップしているということ

なのではないか。

私はどこにお金が集積してしまっているのかを調べてみることにした。

いろんな情報を集めていくと、私は「内部留保」という言葉に出会った。内部留保は、企業が生み出した利益から税金や配当、役員報酬などの社外流出分を差し引いたお金で、社内に蓄積されたもののことだ。簡単にいえば「蓄え」である。日本には約 535 兆円の内部留保がある¹⁾。ここ数年では、そのお金を自助努力に使える、社会全体は今より楽になるのではないかと、というような批判も多く、どちらかという問題視されることが多かったようだ。

そもそも日本の労働者は圧倒的に日本人が多いのだから、企業の貯蓄志向は国民の生活習慣にも関連があるだろう。

ここまで考えたとき、私は自分の経験上で思い当たることがいくつかあった。

お小遣いをもらえば、貯金するように言われた。周りから使い道を聞かれたとき、貯金するというとしっかり者だと褒められた。学校では、散財して路頭に迷うキャラクターのエピソードから問題点や教訓を学び、お金を慎重に使うことの大切さを学んだ。

こういった経験によって、無自覚に「お金を慎重に使う＝貯金する」という誤った方程式を自分の中に作り上げてしまったのだ。

ところで、この貯蓄志向は私だけのものなのだろうか。もしも日本人の多くがこの貯蓄志向であるならば、それはもはや日本の風潮だといえるのではないだろうか。

日銀が 2019 年 8 月末に発表した資料によると、家計の金融資産のうち、「現金・預金」が占める割合は、米国が約 1 割、欧州が約 3 割強なのに対し、日本は 5 割を超える²⁾。

また、教育の観点からは、「お金のまわり方」と「金融リテラシー」といった部分の内容は充実しているのに対し、それらと個人のお金の使い方の結びつきや、お金をまわすために貯蓄と支出のバランスをとることの重要性をわかりやすくするための内容が薄い。これらのことが日本人の貯蓄志向の背景にあるといえよう。

ところで、なぜ貯蓄志向が問題なのだろうか。冒頭でも軽く触れたが、お金とは「経済の血液」である。もしも、一定量ある血液をため込みすぎるとどう

なるか。

送られる血液量が減ってゆき、血の回らなくなった器官から壊死していく。それを救うため、心臓は大きな負担を強いられる。

では、お金が社会の「血液」ならば、「器官」と「心臓」とは何だろう。ここでは、「企業や各地の銀行」と「中央銀行」であろうと私は考えた。つまり、私たちの偏った習慣は社会全体に悪影響を及ぼす恐れもあるということだ。

そうなったときに、さらに問題がある。この貯蓄志向の偏りの危険性が指摘されている段階から、このコロナ禍で、貯蓄志向がさらに加速したことだ。三井住友銀行、2020年4月のアンケート調査によると、「10万円の給付金をどのように使いますか」という質問に対し、「貯蓄・未定」と答えた人は約67%にのぼっている³⁾。

社会の血液を循環させていくためには、簡単にいえば広い視野を持つことが大切だ。もし、「お金はまわる」というシステムを適切に理解していない人が増え続ければ、貯め込む量だけが増え、まわされる血液量がどんどん減り、結果として社会全体を血液不足にしてしまうこともある。

日本人に染みついた貯蓄に偏った習慣を修正して、全体に血液を行きわたらせるためには、特に次の世代の主軸となる私たちから、気づき、考え、修正する必要がある。お金は貯めるだけでも、使うだけでもまわらない。両方のバランスがとれていなければならない。

国民の志向や生活習慣から、国があれこれ思案して政策を立て、銀行がお金の量を調節してくれるわけだが、私は、国や銀行任せにして責任ばかりを追及してはならないと思う。何故なら、個人がお金を持つということは選択肢を持つことを意味し、その個人がどう動くかによって、大多数のお金の使い方が決まり、日本のどこにお金が集まるかが決まっていくからだ。私たちは気づかなければならない。一個人の買い物はどこにお金を流しているのかを決めていて、日本の消費傾向にとっても小さくではあるが、間違いなく影響を与えているということに。そして、日本の経済状況を変える力を持っているのは、国や銀行だけでなく、私たち一人ひとりなのだ。

私は、一高校生として、何ができるかを改めて考えた。散々思案に暮れた末、学校に通わせてもらっている今の状況を最大限活用しようという結論に至った。

つまるところ、社会の物事を知ろうと思った。元々私はお金というものに、人並み以上に興味を持つことはなかったため、あまり深く考えることもなかった。こうしてこの小論文を書く機会を与えられなければ、自分の考えをまとめることもなかったかもしれない。ある意味、私はやっと一人の消費者としてスタートラインに立ったようなものだ。だからこそ、もっと先を歩いていくためには、常にお金の流れを観察し、時には今のように自分のお金の使い方を、立ち止まって考えなければならない。立ち止まって考えるためにお金に絡む様々な事情を知り、理解する必要がある。将来もっと大きなお金を扱うことになるであろう消費者の一人として、日々のお金の流れを観察し、学校で学ぶ知識と結びつけながら、「流れを見る力」を身に付けていきたい。天下のまわりものが正しくまわり、みんなで幸せになれる社会になることを切に願いながら私なりにできることを考え続けていきたいと思う。

(注)

- 1) 財務総合政策研究所「報道発表 四半期別法人企業統計調査（令和2年1～3月期）（確報）結果の概要」（25ページ目 3.〔金融業、保険業を含む全産業〕資産・負債・純資産及び損益と規模別主要項目）2020年7月27日
URL https://www.mof.go.jp/pri/reference/ssc/results/2020.1-3_revised.pdf
閲覧日 2020年8月1日
- 2) 日本銀行調査統計局「資金循環の日米欧比較」2019年8月29日
URL <https://www.boj.or.jp/statistics/sj/sjhiq.pdf>
閲覧日 2020年8月1日
- 3) 三井住友銀行「マネーを楽しむ学びの場『マネービバ』」2020年6月24日記事「#24 コロナ禍でお金への意識が変わった人が約半数！家計のためにできることは？」
URL <https://money-viva.jp/money-news/0024/>
閲覧日 2020年8月1日

